

1998 年京大理 [3]

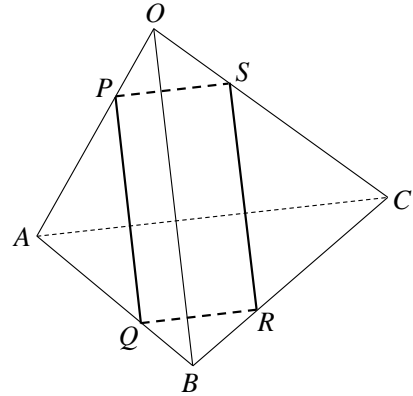
$p, q, r, s$  は、1 より小さい正の実数とする。

$\vec{OP} = p\vec{OA}, \vec{BQ} = q\vec{BA}, \vec{BR} = r\vec{BC}, \vec{OS} = s\vec{OC}$  とすると

$$\vec{PS} = \vec{OS} - \vec{OP} = -p\vec{OA} + s\vec{OC} \quad \text{--- ①}$$

$\vec{OQ} = q\vec{OA} + (1-q)\vec{OB}, \vec{OR} = (1-r)\vec{OB} + r\vec{OC}$  であるから

$$\vec{QR} = \vec{OR} - \vec{OQ} = -q\vec{OA} + (q-r)\vec{OB} + r\vec{OC} \quad \text{--- ②}$$



4 点  $P, Q, R, S$  をこの順に結んでできる図形が平行四辺形であるとき、 $\vec{PS} = \vec{QR}$  である。

$\vec{OA}, \vec{OB}, \vec{OC}$  は一次独立であるから、ベクトルの一意性により  $p = q, q - r = 0, s = r \quad \therefore p = q = r = s$

このとき、平行四辺形  $PQRS$  の 2 本の対角線の交点は、互いの中点であるから、これを  $L$  とすると

$$\vec{OL} = \frac{1}{2}(\vec{OP} + \vec{OR}) = \frac{p}{2}\vec{OA} + \frac{1-r}{2}\vec{OB} + \frac{r}{2}\vec{OC} = \frac{p}{2}\vec{OA} + \frac{1-p}{2}\vec{OB} + \frac{p}{2}\vec{OC} \quad \text{--- ③}$$

次に、 $OB, AC$  の中点を、それぞれ  $M, N$  とすると  $\vec{OM} = \frac{1}{2}\vec{OB}, \vec{ON} = \frac{1}{2}\vec{OA} + \frac{1}{2}\vec{OC}$

線分  $MN$  上の点  $T$  は、 $0 < t < 1$  とし、 $\vec{OT} = (1-t)\vec{OM} + t\vec{ON} = \frac{t}{2}\vec{OA} + \frac{1-t}{2}\vec{OB} + \frac{t}{2}\vec{OC}$  と表せる。

したがって、③と比較し、 $t = p$  とすれば、 $L$  は線分  $MN$  上にあることがわかる。

以上により、示された。(証明終)

※1981 年理 [2] とほぼ同一問題。